

# 高層住宅と子どもの遊びや発達に関する研究

——高層居住は子どもにとって望ましいか——

## 1 はじめに

## 2 方 法

## 3 結果および考察

### 1) 居住階層と関連を有する変数の分析

### 2) 対象児の一人外出の階層比較

### 3) 外出能力と遊び能力との関連

### 4) 精神発達の階層比較

### 5) 幼稚園児、保育園児別の発達得点の階層比較

### 6) 入居時期の早遅の影響について

## 4 ま と め

三宅紀子\*  
山本清洋\*\*  
山崎秀夫\*  
舛本直文\*  
酒井誠\*

## 要 約

1才から6才までの幼児800名を対象に、母親による質問紙法を実施し、高層階居住が子どもの遊びや発達に及ぼす影響を分析した。

一人で外出できる能力と遊びの能力とは関連があり、また、高層階居住児ほど年令が進まないという結果は得られたものの、高層階居住児の精神発達の遅れは認められなかった。これには、母親の影響が強く働いているためではないかと考えられた。また、そのほかの条件を統制していくと、高層居住の子どもに与える影響が徐々に明らかになっていくことが指摘された。

## 1 はじめに

人口の集中化がみられる大都市においては、住宅を確保することが急務とされ、集合住宅が次々と建設されたが、宅地を効率よく使うことができるといって高層集合住宅が注目を集めてきた。たしかに宅地が少ない都市において、住宅を高層化することは、宅地を有効に使うことに通じ、また、ある程度広いオープンスペースを確保できる

というメリットもあげられる。しかし、その反面、高層住宅は、上から物が落下して危険であったり、風が強かったり、多人数が住んでいるためコミュニティが形成されにくいなど、居住者や近隣の住民に多大な影響を及ぼすことは事実である。とりわけ、子どもに与える影響は大であると考えられ、国際遊び場協会(IPA)は「マルタ宣言」の中で「あらゆる高層住宅建築を直ちに禁止し、既存の高層住宅が子どもに及ぼす影響を緩和する緊急手段を講じること」と唱えている。日本

\* 東京都立大学都市研究センター・理学部

\*\* 東京都立大学理学部

においても、高層住宅は子どもの外遊びを阻害するという結果が、湯川他(1979)の調査によって指摘されており、新田(1980)も高層階居住と子どもの屋外遊びの回数および子どもの遊びに対する大人の付き添い程度との関係について同様の結果を報告し、高層住宅は子どもの外遊びに対してマイナス要因であるとしている。高層団地における幼児の生活時間調査を通して、東工大の原(1979)は、外出能力獲得時期の平均は、高層と低層では明白な差があり、8.5か月の差があるとし、また母親からの自立についても、高層居住児は母親との接触時間が小差ながら多い傾向にあり、親から離れて外遊びができるようになった時期が遅れる傾向にあると報告している。海野他(1983)も「低層階ほど、小さいうちから一人で外遊びをすることを許される」、「同年令の子どもを比較した場合、付き添いの不必要な子どもの方が外遊び時間が長い」という結果とともに、外遊び時間を外的基準にして種々の条件を考慮し、外遊びの規定要因を分析している。

以上のような研究がなされているが、これらは主に屋外遊びの時間(量)や母親との接触時間(量)など量的に子どもの生活をとらえ、比較検討したものであるが、本研究では、子どもの遊びの世界を質的にとらえる試みを含め、子どもの生活の量的な側面、質的な側面の両方に着目し、高層居住が子どもに与える影響を分析していく。

## 2 方 法

### 1) 調査対象

高島平団地、および多摩ニュータウン内の団地に居住する1才から6才までの幼児を対象とした。幼児を対象としたのは、先行研究より幼小の子どもの方がより強く居住階層の影響を受けるという理由による。

### 2) 回収方法

調査用紙は幼稚園、保育園を通じ、園児に家庭に持ち帰らせ、母親、または母親相当の人に記入

してもらい、園で回収する方法をとった。

### 3) 調査内容

図1のような分析の枠組を設定し、これに基づき、22項目から成る質問紙と子どもの精神発達をみる質問紙とを作成した。

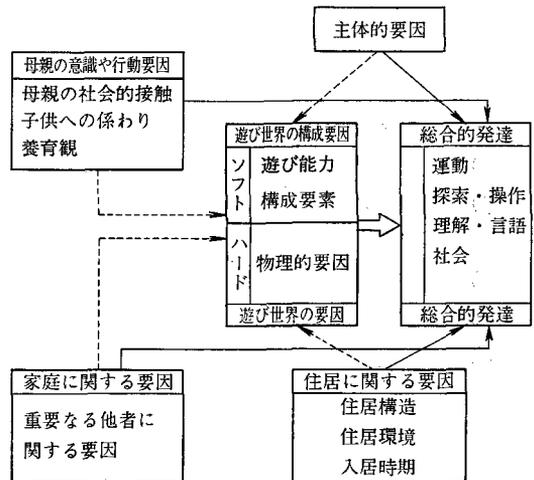


図1 分析枠組

各要因ごとの調査内容は以下の通りである。

#### A 母親の意識や行動

項目番号(3) (母親の) 余暇活動

(5)近所づきあい

(6)外出回数

(7)遊び場への関心度

(8)子どもの外遊びへのつきそい

(10)種々の遊びや習い事に対する価値観

#### B 遊びの世界

(15)子どもが実際に遊んでいた遊びの状況

——創造性、社会性、自己表出性、活動性、室内遊びの場合の室の広さ、おもちゃや用具、屋外遊びの場合の遊び場までの距離や遊び場の状況、遊具、の9つの観点から——

#### C 主体的要因

(11)おけいこ事やスポーツ教室への参加

(12)幼稚園、保育園への就園

(13)ひとり外出の能力

(14)遊び方

D 家庭や家族に関する要因

- (4)家族でのレクリエーション活動
- (9)母親以外のつきそい人の有無
- (16)同居親族の有無
- (16)きょうだいの有無
- (16)両親の年齢
- (17)母親の就労

E 住居に関する要因

- (1)エレベーターの利用頻度
- (2)玄関からエレベーターまでの距離
- (18)居住階
- (19)間取り
- (20)入居時期
- (21)団地に入居する以前の住居
- (22)以前の住居の環境

子どもの精神発達をみる調査表は、津守らの乳幼児精神発達診断法より、運動、探索、社会、言語の4領域の質問項目を採用した。津守らの質問紙は1～3才用と3～7才用とに分かれているが、3才に相当する質問項目を1～3才用、3～7才用の両方に重複して入れ、3才における切れ目を少しでも緩和できるよう配慮した。なお、2.5才～3.5才については1～3才用に、3.5才以上については3～7才用に回答を求めた。

4) 仮説の設定

高層居住は子どもの遊びや発達を阻害するのではないかという立場から、次のような作業仮説を

設定した。

1. 高層階に住む子ども（高層階居住児）は、低層階に住む子ども（低層階居住児）に比べ、エレベーターの使用や母親の不安感等から1人で外出できるようになるのが遅く、高年齢まで母親の付き添いが必要になるのではないか。
2. 一人で外出できない子どもは、遊び時間が母親の生活時間に支配され、外遊びの時間が減少したり、友だちとの接触が十分に行なわれなかったりして、遊びの世界が貧困になってしまうのではないか。
3. 高層階居住は母親をも戸外へ出にくくするため、家に閉じこもりがちなる母親は、子どもに過度な干渉をし、子どもの発達、特に社会性の発達を遅らせるのではないか。
4. 同じ高層階居住児でも、幼稚園に通っている子どもと保育園に通っている子どもとでは、終業時刻の早い幼稚園児の方が住居の影響をより強く受けるのではないか。
5. 対象児が生まれる以前からすでに入居している家庭の子どもの方が、対象児が生まれたあとで入居してきた家庭の子どもより、住居の影響をより強く受けているのではないか。

3 結果および考察

1) 居住階層と関連を有する変数の分析

表1 年令別、地域別の有効回答数

	男			女			男女計
	多摩	高島平	男子計	多摩	高島平	女子計	
1才6か月未満	0	12	12	0	5	5	17
1才6か月～2才5か月	2	34	36	3	29	32	68
2才6か月～3才5か月	3	47	50	3	43	46	96
3才6か月～4才5か月	11	74	85	7	52	59	144
4才6か月～5才5か月	12	169	181	7	139	146	327
5才6か月～6才5か月	5	72	77	4	67	71	148
計	33	408	441	24	335	359	800

表 2 エレベーターの利用頻度の階層比較

	いつも使う	たいてい使う	あまり使わない	ほとんど使わない	無回答
低層 (N=160)	1 (0.6)	12 (7.5)	16 (10.0)	84 (52.5)	47 (29.4)
中層 (N=290)	61 (21.0)	117 (40.3)	26 (9.0)	37 (12.8)	49 (16.9)
高層 (N=312)	256 (82.1)	50 (16.0)	0 (0.0)	1 (0.3)	5 (1.6)

( )内は%

表 3 母親の近所づきあいの階層比較

	どんなことでもお互いに親しく話を 交わし、互いの家 に行き来するよう な人が数人以上 いる	あいさつや用件だ けではなく立ち話 をするような人が 数人以上いる	道で会えばあいさ つはするが、それ 以上のおつきあい はしない	顔は知っている が、あいさつはし ない人が多い	無回答
低層 (N=160)	37 (23.1)	97 (60.6)	19 (11.9)	3 (1.9)	4 (2.5)
中層 (N=290)	90 (31.0)	149 (51.4)	46 (15.9)	1 (0.3)	4 (1.4)
高層 (N=312)	115 (36.9)	150 (48.1)	45 (14.4)	1 (0.3)	1 (0.3)

( )内は%

表 4 対象児の一人外出の階層比較

	1人で出かけられ る(住棟の外の遊 び場や友だちの 家)	となりの家などエ レベーターや階段 を使わずに行ける 範囲ならば出かけ られる	出かけられると思 うが危ないので誰 かが付き添ってい く	1人では出かけら れない	無回答
低層 (N=160)	91 (56.9)	17 (10.6)	24 (15.0)	24 (15.0)	4 (2.5)
中層 (N=290)	155 (53.4)	50 (17.2)	34 (11.7)	46 (15.9)	5 (1.7)
高層 (N=312)	132 (42.3)	78 (25.0)	38 (12.2)	57 (18.3)	7 (2.2)

( )内は%

年齢別、性別、地域別の有効回答数は表1の通りである。これを居住階層により、低層階(1~2階)、中層階(3~5階)、高層階(6階以上)に分け、全変数とのクロス表を作成し、分析、検討を行なった。なお、ここでは精神発達に関する項目は除外した。これより、居住階層と関連を有す

る変数は、エレベーターの利用頻度( $\chi^2=508.28$ ,  $df=6$ ,  $P<.001$ ), 母親の近所づきあい( $\chi^2=15.37$ ,  $df=6$ ,  $p<.05$ ), 対象児の一人外出( $\chi^2=20.04$ ,  $df=6$ ,  $p<.01$ ), 室内遊びの際の室の広さの認知( $\chi^2=12.95$ ,  $df=6$ ,  $p<.05$ ), 屋外遊びの際の遊具の認知( $\chi^2=36.25$ ,  $df=6$ ,  $p<.001$ ),

表 5 室内遊びにおける室の広さの認知の階層比較

	子どもが自由に動きまわる広さがあった	ある程度子どもが動きまわる広さがあった	家具や物がたくさん置いてあり、遊びに使える場所はあまり広くなかった	子どもがすわれるくらいの広さしかなかった	無 回 答
低 層 (N=160)	21 (13.1)	94 (58.7)	36 (22.5)	1 (0.6)	8 (5.0)
中 層 (N=290)	31 (10.7)	203 (70.0)	44 (15.2)	1 (0.3)	11 (3.8)
高 層 (N=312)	27 (8.7)	195 (62.5)	79 (25.3)	3 (1.0)	8 (2.6)

( ) 内は%

表 6 屋外遊びにおける遊具の認知の階層比較

	ブランコ、シーソーなど子どもの動きに変化を与える遊具がたくさんある	子どもの動きに変化を与える遊具が3~4種類ある	子どもの動きに変化を与える遊具が1~2種類ある	遊具がほとんどない	無 回 答
低 層 (N=160)	33 (20.6)	64 (40.0)	38 (23.7)	13 (8.1)	12 (7.5)
中 層 (N=290)	103 (35.5)	106 (36.6)	44 (15.2)	17 (5.9)	20 (6.9)
高 層 (N=312)	120 (38.5)	138 (44.2)	28 (9.0)	8 (2.6)	18 (5.8)

( ) 内は%

表 7 住居の間取りの階層比較

	1LDK	2DK	2LDK	3DK	3LDK	その他	無回答
低 層 (N=160)	2 (1.2)	86 (53.7)	14 (8.7)	22 (13.7)	12 (7.5)	20 (12.5)	4 (2.5)
中 層 (N=290)	8 (2.8)	145 (50.0)	29 (10.0)	77 (26.6)	21 (7.2)	10 (3.4)	0 (0.0)
高 層 (N=312)	15 (4.8)	193 (61.9)	10 (3.2)	57 (18.3)	19 (6.1)	14 (4.5)	4 (1.3)

( ) 内は%

住まいの間取り ( $\chi^2=45.49$ ,  $df=10$ ,  $p<.001$ ) の6変数であった。この結果を表に示したものが表2~表7である。エレベーターは、高層階ほどその利用頻度が高いことがわかる。母親の近所づきあい、予想に反し、高層階居住者の方がより活発であるという結果がみられた。子どもが1人

外出をできるか、できないかについては、仮説通り、居住階層が高いほど1人外出がむずかしくなるという傾向が明らかとなった。室内遊びの際の室の広さの認知と住まいの間取りについては、居住階層が低いほど、子どもが遊ぶのに、室が十分広いと感じており、現実の住まいの間取りも、低

表 8 対象児の一人外出得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
1.5~2.5才	1.78 (1.09) n=9	1.54 (1.10) n=13	1.78 (1.20) n=9	1.29 (0.49) n=7	1.73 (0.91) n=11	1.43 (0.85) n=14
2.5~3.5才	2.00 (1.25) n=10	2.88 (1.22) n=17 *1	2.09 (1.00) n=21 *1	2.38 (1.04) n=13	2.14 (1.03) n=14	2.24 (0.90) n=17
3.5~4.5才	3.40 (0.91) n=15 **2	2.89 (1.26) n=28	2.50 (1.11) n=30 **2	3.29 (0.99) n=14 *3	2.71 (1.19) n=21	2.41 (1.01) n=22 *3
4.5~5.5才	3.54 (0.88) n=28	3.50 (0.80) n=68	3.38 (0.94) n=73	3.83 (0.48) n=24***6 <sup>*4</sup>	3.54 (0.73) n=52 <sup>*4</sup> *5	3.13 (1.00) n=60***6 <sup>*5</sup>
5.5~6.5才	3.59 (0.85) n=22	3.69 (0.68) n=26	3.90 (0.45) n=20	3.67 (0.71) n=9	3.92 (0.28) n=24	3.68 (0.64) n=34

注) 同数字間に有意差あり \* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$ , \*\*\* :  $p < .001$

( ) 内は標準偏差

階層居住者の方が室数が多いようである。また、屋外遊びの際のブランコ、シーソーなどの遊具についての評価は、高層居住者の方が高かったが、これはどのように解釈できるだろうか。同じ団地、同じ地域に住んでいるのであるから、遊び場はおそらく同一であろう。同じ遊び場にある遊具に対する認知(たくさんある~ほとんどない)が階層によって異なるのは、どのように解釈しようとも不自然である。ここには、高層住居者の解答に対する歪が入りこんでいるのではないかと推察される。高層住宅が子どもの遊びや発達に及ぼす影響を明らかにするという調査目的を回答者にも示しているため、高層階居住者に望ましい方向への回答の片寄りがみられたのではないかと考えられる。

## 2) 対象児の一人外出の階層比較

仮説1を検証するため、子どもの一人外出ができる程度(一人外出得点)を年齢別、性別に低層居住児、中層居住児、高層居住児(以後、低層児、中層児、高層児と記す)を比較し、 $t$ 検定により分析を行なった。一人外出得点の居住階層間の比較分析は、表8の通りである。子どもを同年令でみた場合、一人外出のできる程度が高層児に比して低層児の方が高いという仮説を支持する結果が

得られたのは、2.5~3.5才男子中層児-高層児間( $t=2.19$ ,  $df=36$ ,  $p < .05$ ), 3.5~4.5才男子低層児-高層児間( $t=2.72$ ,  $df=43$ ,  $p < .01$ ), 3.5~4.5才女子低層児-高層児間( $t=2.56$ ,  $df=34$ ,  $p < .05$ ), 4.5~5.5才女子低層児-中層児間( $t=2.09$ ,  $df=64.57$ ,  $p < .05$ ), 同4.5~5.5才女子中層児-高層児間( $t=2.47$ ,  $df=106.91$ ,  $p < .05$ ), 同4.5~5.5才女子低層児-高層児間( $t=4.32$ ,  $df=79.05$ ,  $p < .001$ )であった。仮説に反する結果は皆無であった。これは、原(1979)の調査結果を支持するものであった。

これより、一人で外出をさせるにはあまりに危険な1.5~2.5才児には居住階層間に有意差がみられないが、一人で外出する行動力を獲得しつつある3才児を中心に居住階層間に有意差が認められ、すなわち、高層階居住児は低層階居住児に比べ、一人外出のできる程度が低いことが明らかになり、一人行動がほぼ完成する5~6才児以降には居住階層間に有意な差がみられなかったことになる。付き添いがなくては行動できない状態から、一人ででも行動できるようになる過渡期の子どもに、居住階層の影響がみられるのは、子どもの発達を考えていくうえで重要な問題となるであろう。

表 9 2.5才～3.5才児における外出能力と遊び能力との関連

	男 児				女 児			
	創造性	社会性	表出性	活動性	創造性	社会性	表出性	活動性
外出能力 1群	2.33(1.12) n=9	2.67(1.12) n=9	3.00(0.54) n=8	2.56(0.88) n=9	3.50(0.71) n=2*2	3.00(1.41) n=2	3.50(0.71) n=2	2.50(2.12) n=2
2群	2.92(0.95) n=13*1	2.79(0.89) n=14	3.07(0.73) n=14	2.86(0.77) n=14	2.40(0.83) n=15	2.27(0.88) n=15	2.83(0.72) n=12	3.00(0.93) n=15
3群	2.67(1.16) n=3	2.25(0.96) n=4	3.50(0.71) n=2	3.25(0.96) n=4	2.30(0.95) n=10	2.10(0.99) n=10	3.00(1.00) n=9	3.00(0.82) n=10
4群	2.18(0.88) n=17*1	2.12(0.99) n=17	3.00(0.89) n=11	3.06(0.77) n=16	2.25(0.75) n=12*2	2.00(1.04) n=12	3.00(0.82) n=7	3.08(0.95) n=13

注) 同数字間に有意差あり \* :  $p < .05$

( ) 内は標準偏差

表 10 3.5～4.5才児における外出能力と遊び能力との関連

	男 児				女 児			
	創造性	社会性	表出性	活動性	創造性	社会性	表出性	活動性
外出能力 1群	2.37(1.00) n=30	3.06(0.77) n=31***1	2.84(0.77) n=32	2.91(0.95) n=33	2.64(1.01) n=14	2.85(0.80) n=13	3.17(0.72) n=12	3.23(0.73) n=13
2群	2.53(0.83) n=15	2.67(1.11) n=15*2	3.23(0.60) n=13	3.25(0.78) n=16	2.30(0.95) n=10	2.70(0.68) n=10	3.10(0.74) n=10	3.27(0.79) n=11
3群	2.57(1.09) n=14	3.20(0.41) n=15***3	2.92(0.90) n=12	3.21(1.12) n=14	2.71(0.99) n=14	2.43(0.94) n=14	2.82(0.60) n=11	2.86(0.66) n=14
4群	2.00(1.05) n=10	1.82(0.98)***1 *2 n=11***3	2.57(0.98) n=7	3.00(0.89) n=11	2.80(0.63) n=10	2.67(1.12) n=9	3.13(0.64) n=8	3.11(1.05) n=9

注) 同数字間に有意差あり \* :  $p < .05$  \*\*\* :  $p < .001$

( ) 内は標準偏差

表 11 4.5才～5.5才児における外出能力と遊び能力との関連

	男 児				女 児			
	創造性	社会性	表出性	活動性	創造性	社会性	表出性	活動性
外出能力 1群	2.75(0.89) n=100	3.30(0.70) n=101	3.10(0.78) n=102	3.32(0.79) **1 n=104**2	2.71(1.03) n=72	3.20(0.70) n=74	3.04(0.70) n=73	3.29(0.87) n=73*5
2群	2.89(0.81) n=19	3.16(0.90) n=19	3.06(0.66) n=17	3.47(0.84) **3 n=19**4	2.67(0.99) n=30	3.21(0.94) n=29	2.93(0.83) n=30	3.00(0.95) n=30
3群	2.35(1.11) n=23	2.95(0.95) n=22	2.86(0.91) n=21	2.75(0.94) **2 n=24**4	2.18(0.87) n=11	3.18(0.87) n=11	3.00(0.89) n=11	3.00(1.00) n=11
4群	2.60(1.14) n=5	3.20(0.84) n=5	2.60(0.89) n=5	2.40(0.55) **1 n=5**3	2.17(0.98) n=6	2.50(1.38) n=6	2.83(0.98) n=6	2.50(1.05) n=6*5

注) 同数字間に有意差あり \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

( ) 内は標準偏差

## 3) 外出能力と遊び能力との関連

一人で外出できない子どもは、遊び世界(屋外)が貧困になってしまうのではないかという仮説2.を検証するため、性別、年令別に一人で外出できる程度と筆者らが考案した遊びの世界を測る質問項目のうち、特に遊びの能力を測ると考えられる4尺度(創造性、社会性、表出性、活動性)の評点との関連を分析した。手続きとしては、一人で外出できる程度により対象児を4群に分け、各々のグループの遊び評点をt検定により比較分析する方法をとった。4つの群とは、1群:一人で出かけられる(住棟のそとの遊び場や友だちの家)、2群:となりの家などエレベーターや階段を使わずに行ける範囲ならば出かけられる、3群:出かけられると思うが危ないので誰かに付き添ってもらい、4群:一人では出かけられない、である。性・年令別の各群それぞれの人数、遊び評点の平均値、標準偏差を表9~11に示す。1.5~2.5才児および5.5~6.5才児については、男女とも1~4群にグルーピングしたときの人数が片寄ってしまい、比較検討が困難なため省略した。4グループ間に有意差が認められたのは2.5~3.5才男子の創造性において、2群>4群( $df=28$ ,  $t=-2.22$ ,  $p<.05$ )、3.5~4.5才男子の社会性において、1群>4群( $df=40$ ,  $t=-4.28$ ,  $p<.001$ )、2群>4群( $df=24$ ,  $t=-2.02$ ,  $p<.05$ )、3群>4群( $df=12.63$ ,  $t=-4.39$ ,  $p<.001$ )、4.5~5.5

才男子の活動性において、1群>4群( $df=107$ ,  $t=-2.56$ ,  $p<.01$ )、1群>3群( $df=126$ ,  $t=-3.05$ ,  $p<.01$ )、2群>4群( $df=22$ ,  $t=-2.68$ ,  $p<.01$ )、2群>3群( $df=41$ ,  $t=-2.62$ ,  $p<.01$ )、2.5~3.5才女子の創造性において、1群>4群( $df=12$ ,  $t=-2.18$ ,  $p<.05$ )、4.5~5.5才女子の活動性において、1群>4群( $df=77$ ,  $t=-2.09$ ,  $p<.05$ )であった。また、多変量のためのホテリング  $T^2$  検定を用い、グループ間で遊び能力の4つの尺度の評点が総合的に差があるかどうかを検討した。その結果3.5~4.5才男子において、1群>4群( $df=4.34$ ,  $T^2=16.05$ ,  $p<.01$ )、3群>4群( $df=4.16$ ,  $T^2=19.27$ ,  $p<.05$ )、4.5~5.5才男子において、1群>3群( $df=4.116$ ,  $T^2=12.75$ ,  $p<.05$ )の有意差が認められた。これらはすべて仮説を支持する結果であった。これより、一人で外出できない子どもは外出できる子どもに比べ、屋外における遊びの能力が劣り、豊かな遊び世界をつくっていないのではないかと考察される。また、この傾向は女児に比べ、男児の方がより顕著であることが明らかとなった。

## 4) 精神発達の階層比較

仮説3を検証するため、対象児を性・年令別に分けたのち、低層児、中層児、高層児の3グループに分類し、精神発達得点(運動、探索、社会、言語)をもとにt検定を施し、グループ間の比較分析を行なった。その結果を表12~表16に示す。

表 12 1.5~2.5才児における精神発達得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
運 動	64.11 (3.69) n=9	64.12 (4.22) n=13	66.45 (2.44) n=10	65.79 (1.70) n=7 *1	67.95 (1.74) n=10 *1	66.43 (2.63) n=14
探 索	53.56 (3.91) n=9	52.92 (5.35) n=13	55.70 (2.18) n=10	51.79 (3.59) n=7 **2	55.90 (1.97) n=10 **2	54.32 (3.37) n=14
社 会	40.61 (5.15) n=9	38.96 (4.55) n=12	42.05 (2.78) n=10	39.79 (4.54) n=7	42.80 (3.41) n=10	40.96 (3.99) n=14
言 語	27.44 (3.22) n=9	25.58 (4.94) n=12	27.75 (2.94) n=10	27.50 (4.32) n=6	29.06 (3.14) n=9	27.18 (3.55) n=14

注) 同数字間に有意差あり \* :  $p<.05$  \*\* :  $p<.01$

( ) 内は標準偏差

表 13 2.5～3.5才児における精神発達得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
運 動	68.06 (2.27) n = 9	67.70 (2.31) n = 15	68.85 (1.21) n = 17	67.90 (3.13) n = 10	68.29 (2.76) n = 12	68.94 (1.05) n = 16
探 索	58.25 (3.29) n = 10	56.97 (2.23) n = 15	56.85 (5.64) n = 17	56.86 (3.84) n = 11	58.04 (1.36) n = 13	58.44 (1.32) n = 16
社 会	42.67 (2.92) n = 9	41.40 (3.51) n = 15	43.03 (3.03) n = 17	42.75 (3.44) n = 10	43.12 (2.89) n = 13	43.44 (3.22) n = 16
言 語	30.83 (1.84) n = 9	30.03 (1.63) n = 15	30.47 (2.75) n = 16	31.15 (1.42) n = 10	31.23 (1.29) n = 13	31.19 (1.44) n = 16

( ) 内は標準偏差

表 14 3.5～4.5才児における精神発達得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
運 動	79.84 (5.38) n = 16	81.43 (4.08) n = 28	80.97 (4.07) n = 30	80.83 (6.54) n = 15	80.65 (4.13) n = 20	81.09 (5.65) n = 22
探 索	78.34 (7.69) n = 16	77.93 (7.21) n = 28	78.43 (8.27) n = 29	78.03 (8.23) n = 15	77.70 (6.81) n = 20	76.27 (7.64) n = 22
社 会	64.75 (8.59) n = 16	68.39 (7.64) n = 28	64.26 (8.80) n = 29	68.60(11.57) n = 15	63.85 (7.70) n = 20	68.05 (9.05) n = 22
言 語	42.87 (5.27) n = 16	45.07 (3.73) n = 28 *1	42.78 (3.89) n = 30 *1	44.40 (5.96) n = 15	43.00 (4.57) n = 20	42.91 (3.99) n = 22

注) 同数字間に有意差あり \* :  $p < .05$

( ) 内は標準偏差

表 15 4.5～5.5才児における精神発達得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
運 動	84.60 (4.88) n = 30	84.45 (6.13) n = 69	84.95 (5.04) n = 74	85.83 (3.23) n = 24	85.71 (5.07) n = 53	84.32 (6.59) n = 62
探 索	84.50 (9.53) n = 30	84.03 (9.09) n = 69	85.18 (8.04) n = 74	84.33 (4.85) n = 24	82.83 (6.50) n = 53	82.36 (7.81) n = 62
社 会	71.87 (9.96) n = 30	72.79(10.43) n = 69	72.74 (8.25) n = 74	76.25 (5.26) n = 24 *1	74.85 (8.12) n = 53	72.94 (9.92) n = 62 *1
言 語	47.55 (4.85) n = 29	47.22 (5.99) n = 69	47.47 (4.52) n = 74	48.37 (3.24) n = 24	47.95 (4.26) n = 52	47.23 (5.63) n = 62

注) 同数字間に有意差あり \* :  $p < .05$

( ) 内は標準偏差

表 16 5.5~6.5才児における精神発達得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
運 動	86.40 (5.32) n=20 **1	90.52 (5.46) n=27 **1	88.62 (6.82) n=21	92.33 (1.87) n=9 *2 ***3	88.28 (7.64) n=23 *2	88.94 (4.14) n=35 ***3
探 索	84.25 (8.60) n=20	88.59 (7.12) n=27	87.83(10.02) n=21	89.00 (4.87) n=9	86.37 (9.06) n=23	86.14 (6.97) n=35
社 会	73.80 (9.65) n=20	77.67 (7.35) n=27	76.52(10.87) n=20	79.78 (5.02) n=9	78.04(10.29) n=23	77.11 (7.02) n=35
言 語	48.65 (3.87) n=20	49.52 (3.27) n=27	48.67 (6.14) n=21	50.63 (2.13) n=8	49.98 (4.96) n=23	48.89 (3.42) n=35

注) 同数字間に有意差あり \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$  \*\*\* :  $p < .001$  ( ) 内は標準偏差

表 17 母親の一週間における外出回数階層比較

	買 物	散 歩	ス ポ ー ツ 趣 味 活 動	自 治 会 会 P T A 活 動	子 ども を 連 れ て 外 に 遊 び に 出 る	友 人 宅 訪 問
低 層	5.47 (2.23) n=159 **1	2.39 (3.17) n=147	0.78 (1.37) n=142	0.32 (1.14) n=133	3.04 (2.41) n=155	1.57 (1.58) n=152
中 層	4.90 (1.93) n=285 **1 ***2	1.94 (2.33) n=270	0.64 (1.09) n=270	0.22 (0.75) n=254	2.90 (2.35) n=280	1.42 (1.46) n=273
高 層	5.47 (2.01) n=311 ***2	2.25 (2.79) n=293	0.67 (1.01) n=291	0.14 (0.45) n=278	2.95 (2.40) n=302	1.49 (1.48) n=293

注) 同数字間に有意差あり \*\* :  $p < .01$  \*\*\* :  $p < .001$  ( ) 内は標準偏差

言語領域の得点は満点が73点であるが、54点以上は集計が困難なため、53点を最高点として集計した。なお、各領域の満点は、運動=97点、探索=101点、社会=90点である。精神発達を総合的にみるため、多変量のホテリング  $T^2$  検定も併せて行なった。居住階層間に有意差が認められたのは、3.5~4.5才男子言語：中層児>高層児 ( $df=56$ ,  $t=2.28$ ,  $p < .05$ )、5.5~6.5才男子運動：中層児>低層児 ( $df=45$ ,  $t=-2.59$ ,  $p < .01$ )、1.5~2.5才女子運動：中層児>低層児 ( $df=15$ ,  $t=-2.55$ ,  $p < .05$ )、1.5~2.5才女子探索：中層児>低層児 ( $df=15$ ,  $t=-3.00$ ,  $p < .01$ )、4.5~5.5才女子社会：低層児>高層児 ( $df=84$ ,  $t=2.00$ ,  $p < .05$ )、5.5~6.5才女子運動：低層児>中層児 ( $df=27.49$ ,  $t=2.37$ ,  $p < .05$ )および低層児>高層児 ( $df=29.71$ ,  $t=3.62$ ,  $p < .001$ )であり、ホテリング  $T^2$  検定では、3.5~4.5才男子：中

層児>高層児 ( $df=4, 52$ ,  $T^2=13.11$ ,  $p < .05$ )、1.5~2.5才女子：中層児>低層児 ( $df=4, 11$ ,  $T^2=28.12$ ,  $p < .01$ )、1.5~2.5才女子：高層児>低層児 ( $df=4, 15$ ,  $T^2=28.02$ ,  $p < .01$ )、3.5~4.5才女子：高層児>中層児 ( $df=4, 37$ ,  $T^2=12.24$ ,  $p < .05$ )であった。以上の結果より、中層児が有意に発達得点が高い結果が多く得られているが、高層児の発達得点が他に比して低いという傾向はみられず、したがって仮説3は支持されないこととなる。仮説設定当初より、子どもの発達は個体要因や心理的、社会的要因など様々な要因の相互作用によって決定されるものであり、住居という物理的な要因だけに左右されることはないと考えていたが子ども、特に幼児は成人に比べ、一人で行動できうる範囲がせまいうえに、自主的に行動する機会が少ないので、その生活は母親に依存した家庭中心の生活となり、生活環境としての住居の

影響が大になるのではないかと考えたのである。

また、仮説3の前提条件になっていた高層階居住の母親の外出低頻度傾向の有無については、買物、散歩、スポーツや趣味活動、自治会やPTA活動、子どもを連れて外に遊びに出ること、友人宅訪問の6項目各々の1週間における外出回数を低層、中層、高層、居住階層別に比較することによって検討を加えた。その結果は表17の通りであるが、*t*検定により有意差が認められたのは、買物回数：低層居住者>中層居住者 (*df*=289.61, *t*=2.70, *p*<.01) 買物回数：高層居住者>中層居住者 (*df*=592.49, *t*=-3.52, *p*<.001) であり、高層階居住は母親の外出を抑制していないことが明らかとなった。ここで大変興味深く思われる点は、子どもを屋外に遊びに連れ出す回数が居住階層間でほとんど差がなく、平均値、標準偏差とも6項目の中で階層差が最小という点である。これは本研究の対象となった母親が、居住階層に左右されることなく、子どもを屋外に連れ出し、

遊ばせていることを示すものである。外出能力と遊び能力とは関連があり、また高層階居住児ほど年令が進まないと一人では外出できないという結果は得られたものの、階層間における発達の有意差が認められないのは、この母親の影響が大きいのではないかと考えられる。つまり、子どもを屋外に連れ出すことへの母親の積極性が、高層階居住の子どもへのマイナスの影響を緩和しているのではないだろうか。

5) 幼稚園児、保育園児別の発達得点の階層比較

同じ高層階居住児でも、保育園に通っている子どもは、夕がたまで園で生活しているため、園での遊び世界が確保されているが、一方、幼稚園に通っている子どもは終業時刻が早いいため、午後はほとんど家庭を中心とした生活になり、居住階層等住居の影響をより強く受けるのではないかという仮説に基づき、対象を幼稚園児、保育園児に分け、各々のグループにおいて、性・年令別に低

表 18 1.5~3.5才児における幼稚園児、保育園児ごとの精神発達得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
幼稚園児 運 動	64.88 (4.05) n=4	n=0	67.25 (1.06) n=2	67.00 (0.0) n=1	69.00 (1.41) n=2	69.75 (0.35) n=2
探 索	54.75 (4.52) n=4	n=0	58.50 (1.41) n=2	59.00 (0.0) n=1	58.75 (1.77) n=2	59.00 (0.0) n=2
社 会	39.25 (5.33) n=4	n=0	40.50 (2.12) n=2	45.50 (0.0) n=1	41.75 (0.35) n=2	46.25 (1.06) n=2
言 語	28.00 (3.56) n=4	n=0	27.75 (0.35) n=2	32.50 (0.0) n=1	33.00 (0.0) n=2	31.00 (2.83) n=2
保育園児 運 動	66.19 (3.57) n=13	65.53 (4.32) n=17 *1	67.90 (2.14) n=24 *1	66.80 (3.30) n=10	67.69 (2.80) n=13	67.74 (2.34) n=19
探 索	56.18 (4.36) n=14	55.06 (5.36) n=17	57.02 (2.10) n=24	54.80 (4.02) n=10	57.07 (1.90) n=14	56.63 (3.19) n=19
社 会	42.69 (3.65) n=13	40.28 (3.34) n=16 *2	42.81 (3.01) n=24 *2	42.20 (4.22) n=10	43.46 (2.89) n=14	41.89 (3.79) n=19
言 語	29.65 (3.03) n=13	28.66 (3.99) n=16	29.44 (3.16) n=24	30.20 (3.35) n=10	30.65 (1.83) n=13	29.32 (3.46) n=19

注) 同数字間に有意差あり \* : *p*<.05

( ) 内は標準偏差

表 19 3.5~4.5才児における幼稚園児, 保育園児ごとの精神発達得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
幼稚園児 運 動	82.75 (3.78) n=4	83.25 (4.09) n=12	82.25 (3.30) n=4	81.33 (7.64) n=3	78.88 (2.23) n=8 ***3	86.00 (3.54) n=5 ***3
探 索	75.50 (5.20) n=4	79.17 (7.61) n=12	80.00 (6.06) n=4	79.33 (4.04) n=3	76.50 (5.68) n=8	81.80 (2.28) n=5
社 会	65.50 (3.70) n=4	70.42 (6.58) n=12	68.00 (1.83) n=4	80.67 (8.39) n=3 **1	63.88 (7.70) n=8 **1	76.60 (2.70) n=5
言 語	42.25 (4.03) n=4	46.33 (4.12) n=12	44.75 (2.36) n=4	49.33 (3.06) n=3 *2	42.13 (4.67) n=8 *2	45.40 (2.88) n=5
保育園児 運 動	79.44 (5.46) n=9	80.33 (3.56) n=15	80.80 (4.28) n=25	80.71 (6.61) n=12	81.70 (4.55) n=10	81.07 (4.63) n=14
探 索	80.44 (5.48) n=9	77.20 (7.18) n=15	77.69 (8.46) n=24	77.71 (9.09) n=12	78.90 (8.06) n=10	76.36 (7.37) n=14
社 会	67.22 (5.23) n=9	66.33 (8.22) n=15	63.10 (9.11) n=24	65.58(10.39) n=12	64.50 (8.46) n=10	67.29 (7.50) n=14
言 語	44.00 (4.82) n=9	44.07 (3.33) n=15	42.22 (3.87) n=25	43.17 (5.94) n=12	43.40 (4.03) n=10	43.07 (3.22) n=14

注) 同数字間に有意差あり \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$  \*\*\* :  $p < .001$ 

( ) 内は標準偏差

表 20 4.5~6.5才児における幼稚園児, 保育園児ごとの精神発達得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
幼稚園児 運 動	85.26 (5.20) n=43	85.23 (6.88) n=61	84.87 (5.48) n=62	87.17 (3.60) n=23 *1	86.59 (5.46) n=53	84.92 (7.05) n=63 *1
探 索	84.86 (9.07) n=43	84.23 (9.43) n=61	85.78 (8.84) n=62	85.70 (4.72) n=23 *2	83.73 (6.98) n=53	82.75 (8.28) n=63 *2
社 会	72.98 (9.99) n=43	72.71(11.03) n=61	73.01 (9.65) n=62	76.61 (5.43) n=23	75.51 (7.52) n=53	73.75(10.35) n=63
言 語	48.19 (4.63) n=42	47.27 (6.16) n=61	47.74 (5.32) n=62	48.64 (3.27) n=22	48.24 (4.01) n=53	47.42 (5.73) n=63
保育園児 運 動	85.71 (4.61) n=7	87.77 (5.60) n=35	87.42 (5.69) n=33	88.60 (5.21) n=10	86.24 (7.32) n=23	87.97 (3.56) n=34
探 索	81.57 (9.34) n=7	87.20 (7.28) n=35	85.73 (8.06) n=33	85.40 (6.52) n=10	84.30 (8.69) n=23	85.53 (6.22) n=34
社 会	70.57 (8.77) n=7 *3	76.69 (6.88) n=35 *3	74.59 (7.41) n=32	78.60 (5.21) n=10	76.52(11.61) n=23	75.74 (6.38) n=34
言 語	46.86 (3.34) n=7	48.91 (3.79) n=35	47.73 (4.11) n=33	49.60 (2.84) n=10	49.39 (5.66) n=22	48.59 (3.13) n=34

注) 同数字間に有意差あり \* :  $p < .05$ 

( ) 内は標準偏差

層・中層・高層の階層間の発達得点の有意差を検討した。ここでは、対象の人数を確保するため、年令を1.5~3.5才, 3.5~4.5才, 4.5~6.5才の3群に分けて処理した。結果を表18~20に示す。幼稚園児では、4.5~6.5才女児の運動、および探索の領域において、高層階居住児よりも低層階居住児の方が有意に発達得点が高い(運動:  $df=74.74, t=1.94, p<.05$ , 探索:  $df=68.45, t=2.05, p<.05$ ) という結果が得られ、また、3.5~4.5才女児の社会性、および言語の領域において、中層階居住児よりも低層階居住児の方が有意に発達得点が高いことがわかった(社会性:  $df=9, t=3.16, p<.01$ , 言語:  $df=9, t=2.44, p<.05$ )。ここで中層に住む3.5~4.5才女児の得点を見ると、同じ3.5~4.5才女児で低層や高層に住む子どもと比較すると得点が極端に悪いことがわかる。それが、3.5~4.5才女児の発達全体( $df=4, 8, T^2=26.24, p<.05$ )と運動の領域( $df=11, t=-4.50, p<.001$ )において、中層階居住

児よりも高層階居住児の発達得点が高いという仮説に反する結果を導いたのではないかと考えられる。一方、保育園に通っている子どもを検討した結果は、1.5~3.5才男児の運動( $df=21.58, t=-2.09, p<.05$ )、および社会性( $df=38, t=-2.50, p<.05$ )の領域において、中層居住児よりも高層居住児の方が有意に得点が高かったことと、4.5~6.5才男児の社会性の領域において低層居住児よりも中層居住児の方が有意に得点が高かったこと( $df=40, t=-2.05, p<.05$ )であり、保育園児の場合、高層階居住と発達の遅れととの有意な関係はみられず、むしろ逆の結果が若干みられたと言える。幼稚園児、保育園児を比較すると、幼稚園児には4.5~6.5才女児において、高層階居住と発達の遅れに関連があることが見い出されたが、一方保育園児にはそのような関連が見い出されなかった。これは幼稚園児の方が住居環境の影響をより強く受けるのではないかという仮説を支持する傾向にあるものと考えられる。

表 21 1.5~3.5才児における入居時期の違いによる精神発達得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
生まれる以前 に入居した児 運 動	66.18 (3.20) n=14 *4	62.17 (7.27) n=26 **4	67.18 (3.08) n=22 **5	67.05 (3.40) n=11	66.55 (5.76) n=20	67.89 (2.37) n=19
探 索	55.25 (4.30) n=14	51.90 (6.45) n=25 *6	55.59 (5.38) n=22 *6	54.88 (5.12) n=12	55.62 (5.74) n=20	56.45 (3.41) n=19
社 会	42.14 (4.40) n=14 **7	37.20 (5.95) n=25 **7 **8	41.86 (3.73) n=22 **8	40.73 (4.68) n=11	41.25 (5.73) n=20	41.97 (4.07) n=19
言 語	28.93 (3.52) n=14 **9	24.76 (6.16) n=23 **9 **10	28.93 (3.62) n=21 **10	29.45 (3.81) n=11	28.26 (6.22) n=19	28.95 (3.62) n=19
生まれてから 入居した児 運 動	64.50 (7.07) n=2	68.19 (2.39) n=8	68.93 (1.54) n=7	67.50 (1.08) n=4	68.25 (1.26) n=4	67.89 (1.85) n=9
探 索	58.50 (5.77) n=3	57.44 (2.47) n=8	57.50 (2.14) n=7	53.38 (2.29) n=4	55.88 (2.81) n=4	56.78 (2.86) n=9
社 会	36.00 (2.12) n=2 *1 *2	42.00 (2.92) n=8 *1	43.71 (3.55) n=7 *2	42.13 (2.36) n=4	43.25 (1.50) n=4	43.11 (2.95) n=9
言 語	27.50 (0.71) n=2 ***3	31.00 (0.54) n=8 ***3	29.21 (3.63) n=7	29.67 (1.76) n=3	30.88 (2.46) n=4	30.17 (2.53) n=9

注) 同数字間に有意差あり \* :  $p<.05$  \*\* :  $p<.01$  \*\*\* :  $p<.001$

( ) 内は標準偏差

表 22 3.5~4.5才児における入居時期の違いによる精神発達得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
生まれる以前 に入居した児 運 動	80.94 (4.99) n=9	81.21 (4.37) n=19	81.58 (4.39) n=19	82.20 (4.09) n=5	80.80 (4.98) n=10	80.00 (6.01) n=15
探 索	78.94 (8.71) n=9	77.32 (7.15) n=19	78.24 (8.91) n=19	80.60 (2.88) n=5	79.30 (9.01) n=10	74.87 (7.64) n=15
社 会	62.44(10.45) n=9	67.53 (8.41) n=19	63.50 (9.58) n=19	69.00 (7.21) n=5	62.80 (9.78) n=10	66.47 (9.57) n=15
言 語	41.89 (6.39) n=9	44.79 (3.75) n=19	42.55 (4.27) n=19	46.00 (2.65) n=5	43.40 (4.40) n=10	42.00 (4.18) n=15
生まれてから 入居した児 運 動	76.80 (6.38) n=5	81.89 (3.59) n=9	79.78 (3.70) n=9	79.14 (6.31) n=7	80.89 (3.30) n=9	83.43 (4.24) n=7
探 索	77.60 (8.20) n=5	79.22 (7.58) n=9	77.56 (6.56) n=9	77.36 (9.00) n=7	76.11 (3.52) n=9	79.29 (7.23) n=7
社 会	66.20 (4.44) n=5	70.22 (5.70) n=9	65.67 (7.81) n=9	67.86(11.94) n=7	64.33 (5.17) n=9 *1	71.43 (7.32) n=7 *1
言 語	45.00 (3.74) n=5	45.67 (3.84) n=9	43.22 (3.53) n=9	44.57 (6.88) n=7	42.56 (5.22) n=9	44.86 (2.91) n=7

注) 有意差あり \*:  $p < .05$ 

( ) 内は標準偏差

表 23 4.5~6.5才児における入居時期の違いによる精神発達得点の階層比較

	男 児			女 児		
	低 層	中 層	高 層	低 層	中 層	高 層
生まれる以前 に入居した児 運 動	86.19 (4.99) n=27	86.21 (7.18) n=51	85.87 (5.57) n=52	86.79 (3.71) n=19	86.90 (5.57) n=46	86.08 (6.75) n=58
探 索	86.30 (8.10) n=27	85.41 (9.30) n=51	85.44 (8.19) n=52	85.26 (4.74) n=19	83.76 (7.00) n=46	83.21 (7.03) n=58
社 会	73.74 (8.63) n=27	74.52(10.13) n=51	73.29 (9.13) n=52	76.47 (5.69) n=19	75.89 (8.37) n=46	73.43 (9.36) n=58
言 語	48.19 (3.96) n=27	48.02 (4.96) n=51	47.29 (4.68) n=52	48.58 (3.44) n=19	48.17 (4.31) n=45	47.69 (5.17) n=58
生まれてから 入居した児 運 動	84.70 (4.14) n=10	85.99 (5.97) n=42	85.63 (5.82) n=43	88.18 (4.92) n=11	86.12 (6.68) n=29	85.35 (5.19) n=36
探 索	85.00 (7.72) n=10	85.19 (8.52) n=42	86.15 (9.01) n=43	85.64 (6.61) n=11	83.88 (8.34) n=29	83.96 (8.62) n=36
社 会	72.70 (8.96) n=10	73.45 (9.85) n=42	73.87 (8.81) n=42	77.91 (5.43) n=11	75.69 (9.95) n=29	75.49 (8.70) n=36
言 語	49.56 (2.13) n=9	47.63 (6.12) n=42	48.28 (5.18) n=43	49.70 (2.95) n=10	49.22 (4.97) n=29	48.04 (4.87) n=36

( ) 内は標準偏差

付表1 父親の年令

	25才以下	26才～29才	30才～34才	35才～39才	40才～44才	45才～49才	50才以上	無	未記入
低層 n=160	0 (0.0)	15 (9.4)	60 (37.5)	52 (32.5)	18 (11.2)	2 (1.2)	1 (0.6)	6 (3.7)	6 (3.7)
中層 n=290	1 (0.3)	16 (5.5)	113 (39.0)	112 (38.6)	32 (11.0)	2 (0.7)	2 (0.7)	5 (1.7)	7 (2.4)
高層 n=312	0 (0.0)	10 (3.2)	97 (31.1)	132 (42.3)	42 (13.5)	7 (2.2)	1 (0.3)	11 (3.5)	12 (3.8)

( )内は%

付表2 母親の年令

	25才以下	26才～29才	30才～34才	35才～39才	40才～44才	45才～49才	50才以上	無	未記入
低層 n=160	3 (1.9)	35 (21.9)	68 (42.5)	37 (23.1)	10 (6.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (4.4)
中層 n=290	3 (1.0)	57 (19.7)	126 (43.4)	83 (28.6)	15 (5.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (2.1)
高層 n=312	1 (0.3)	34 (10.9)	149 (47.8)	93 (29.8)	17 (5.4)	2 (0.6)	1 (0.3)	1 (0.3)	14 (4.5)

( )内は%

付表3 母親の就業形態

	定職	パートタイム (自宅外)	家庭内	その他	無職	未記入
低層 (n=160)	44 (27.5)	17 (10.6)	16 (10.0)	3 (1.9)	74 (46.2)	6 (3.7)
中層 (n=290)	76 (26.2)	35 (12.1)	29 (10.0)	7 (2.4)	138 (47.6)	5 (1.7)
高層 (n=312)	94 (30.1)	41 (13.1)	28 (9.0)	6 (1.9)	135 (43.3)	8 (2.6)

( )内は%

## 6) 入居時期の早遅の影響について

仮説5を検証するため、対象を対象児が生まれてから現在の住居に移り住んできた家庭の児と対象児が生まれる以前から既に現在の住居に住んでいる家庭の児の2グループに分け、各々のグループにおいて、性・年令別に低層・中層・高層間の発達得点の有意差を検討した。ここでは、年令を1.5～3.5才、3.5～4.5才、4.5～6.5才の3群に分けて処理した。

対象児が生まれてから、現在の住居に移り住ん

できた家庭の児において、階層間の発達得点の有意差が認められたのは、1.5～3.5才男子の社会 ( $t=-2.68$ ,  $df=8$ ,  $p<.05$ ) と言語 ( $t=-7.92$ ,  $df=8$ ,  $p<.001$ ) の2領域における低層児<中層児の結果と同男子の社会 ( $t=-2.85$ ,  $df=7$ ,  $p<.05$ ) における、低層児<高層児の結果であった。また、同男子の低層児と中層児においては、4領域をすべて含めた発達全体としても、危険率3%で中層児の方が有意に得点が高かった ( $df=4, 5$ ,  $T^2=42.93$ )。一方、女子については、3.5～4.5才女児の社会の領域において、その発達得点

が中層児<高層児( $t=-2.28$ ,  $df=14$ ,  $p<.05$ )に有意差が認められるだけであった。以上のように生まれてから入居してきた子どもたちには、高層居住の悪影響がみられないばかりでなく、むしろ中層児、高層児の方が発達得点が高いという結果となった(表21~23参照)。これに比べ、対象児が生まれる以前から既に現在の住居に住んでいる家庭の児においては、3.5~4.5才男児の発達全体において、高層児よりも中層児の方が有意に発達得点が高い結果( $T^2=12.03$ ,  $df=4, 33$ ,  $p<0.05$ )となり、また、女子についても、3.5~4.5才女児の発達得点全体について、高層児よりも中層児の方が有意に得点が高かった( $T^2=19.85$ ,  $df=4, 20$ ,  $p<0.01$ )。ここで3.5~4.5才男児の発達得点全体において、低層児<中層児( $T^2=15.68$ ,  $df=4, 23$ ,  $p<0.05$ )の結果が得られているが、この結果は参考程度にとどめたい。なお、1.5~3.5才男児については、探索の領域の低層児の得点と中層児の得点間にこそ有意差は認められないものの、そのほかの3領域(運動、社会、言語)に関しては、各領域とも、低層児>中層児、高層児>中層児間に有意差がみられた。低層児と高層児の発達得点の分布が類似していることと中層居住児の発達得点の分散が低・高層児に比して著しく大であることから、この結果は中層居住児の発達得点がマイナス方向に歪んだためではないかと考察される。以上の結果より、生まれてから入居してきた子どもには、高層居住の発達に及ぼす悪影響はみられないが、生まれる以前に入居していた子どもには、3.5~4.5才児を中心にその傾向がみられるのではないかと考察される。

#### 4 ま と め

高層居住が子どもの遊びや発達に与える影響を検討してきたが、以下のような結論が得られた。高層階居住児は、低層階居住児に比べ、一人で外出できるようになる時期が遅い傾向にあるが、特に自立の能力が高まり、自発的に行動を起こそうとし始める3才児を中心に、階層間に有意差が認められるのは、子どもの発達を考えていく上で、

重要な問題となるであろう。

同性、同年令の子どもを抽出し、一人で外出できる程度をもとに屋外における遊び能力を比較した結果、一人で外出できない子どもは外出できる子どもに比べ、屋外における遊びの能力が劣ることが明らかとなった。子どもにおける遊びの世界は、心身の発育発達を促進する絶好の機会であると考えられるから、豊かな遊びの世界を造り得ない子どもは発達のチャンスを見ず見す逃すことになりかねない。それでは、一人で外出するのが低層階に比べて困難な高層階に生活する子どもには発達の遅れがあるのかという点、本研究においては、そのような差異は得られなかった。その理由には母親の存在が考えられる。本研究の対象となった母親は、高層階に住んでいても決して囲りから孤立せず、むしろ近所づきあいを活発に行って生活を開放的にするとともに、地面との隔たりに左右されることなく、子どもを屋外に連れ出し、遊ばせていることが明らかとなった。外出能力と遊び能力とは関連があり、また高層階居住児ほど年令が進まないと一人で外出できないという結果が得られたものの、高層階居住児の発達の遅れが認められないのは、この母親の影響が大きいのではないかと考えられる。

子どもの一日の生活を考慮した上で、さらに分析を進め、一日の大部分の時間を家庭で過ごす幼稚園児と、日中は園での団体生活をしている保育園児とに分けて、発達における居住階の影響を追ってみたところ、幼稚園児の4.5~6.5才女児に低層-高層間に発達の有意差を認めた。保育園児に関しては、高層階居住と発達の遅れとの関連は見い出さず、むしろ逆の結果もみられた。また、入居時期の問題を取り上げ、生まれる以前から入居している児と生まれてから入居してきた児とに分けて、発達の階層間比較を行なったところ、生まれてから入居してきた子どものグループにおいては、高層居住と発達の遅れとの間には関連が見い出せなかったが、生まれる以前から入居していた児のグループに関しては、男女とも3.5~4.5才児に中層-高層間に発達の有意差を認めた。

以上より、幼稚園児、保育園児の別、入居時期

の問題など、条件を統制していくと、居住階層の子どもにも与える影響がわずかながら明らかになっていくようである。

本研究においては、母親の関わり方が大きな影響を持つのではないかと考察されたが、今後は事例研究等も含め、より詳細な分析が課題として残された。

### 文 献 一 覧

浅見千鶴子・稲毛教子・野田雅子

1980『乳幼児の発達心理』2冊 大日本図書

一番ヶ瀬康子他

1969『子どもの生活圏』日本出版放送協会

海野道郎他

1983 a 「高層住宅の理想像を求めて—芦屋浜シーサイドタウンにおける事例研究(1)」『関西学院大学社会学部紀要』46号, pp. 271—296

1983 b 「高層住宅は子供の外遊びを阻害するか(1)—外遊びの現状と規定要因の全体像」『関西学院大学社会学部紀要』47号, pp. 119—137

1984 c 「高層住宅は子供の外遊びを阻害するか(2)—外遊びの規定要因の全体像(続)」48号, pp.

137—152

津守 真・稲毛教子・磯部景子

1970 『乳幼児精神発達診断法』2冊 大日本図書  
新田米子

1980 「高層階居住による子どもの遊びへの影響—高島平団地の場合—」『家政学研究』27巻, 1号, pp. 35—41, 奈良女子大学家政学会

早川和男

1984 『新・日本住宅物語』朝日新聞社

原 芳男

1979 「幼児の生活とテレビ視聴—都市高層団地における幼児の生活時間調査を通して」『放送のための新しい幼児教育プログラムの開発』pp. 28—83, (財)放送文化基金

深谷昌志・深谷和子

1975 『現代子ども論』有斐閣双書

藤本浩之輔

1974 『子どもの遊び空間』日本放送出版協会

松浦義行他

1983 『体力発達に関与する生活諸条件の追跡的研究』昭和57年度科学研究費補助金研究 成果報告書

### Key Words (キー・ワード)

**High-Rise-Housing** (高層居住), **Child's Play** (子どもの遊び), **Child's Mental Development** (子どもの精神発達), **Questionnaire** (質問紙法), **Test of Significant Difference** (有意差検定)